

ていふそめじよぎょうじょう

#18 貞婦染女行状

作者：日尾邦子（ひお・くにこ 1814-1885）

刊行：安政4年（1857）



解題

■ 内容

武蔵国多摩郡大谷村（おおやむら 現・東京都町田市南大谷）の農民、平左衛門の妻「染」が、いかに夫や義母につくし、義兄や義妹を更生させた賢い働き者であるかを記したものである。染は駿州（現・静岡県）の生まれだが、7歳で小田原宿に遊女として売られ、



[K97/21]

その後神奈川宿で遊女をしているうちに平左衛門と懇意になり、21歳で身請けされる。身請けの際には平左衛門に対して「これからは心を入れ替えて家業にはげみ、祖母様母様に孝行をつくすと誓ってください。それできれいば夫婦にはなりません」というほどの強さである。

嫁入りしてからは、着飾ることにはまったく関心をもたず、家産の助けになればと、持参した衣類や装飾品をすべて売り払った。自分の身請けのために家を傾けたと思い、朝から晩まで働いて儉約につとめ、しかもつゆほども「働顔」（はたらきがお。いかにも働いているという表情）など見せなかったという。このような逸話が多々つづられていて、染がいかにすばらしい女性であったかを知らしめる内容になっている。本文に振り仮名が多いため初学者でも比較的読みやすかったと思われる、当時の対象読者（手習に通う女子）に、よき妻・嫁と言われるようにするにはどうすればよいのかということ伝える意図もあったのではないかと思われる。

安政4年（1857）に江戸文苑閣（播磨屋勝五郎）から刊行された1冊本で、本文は22丁、跋文（あとがき）が2丁。跋文末尾に「嘉永7年秋」（1854）

との記載と「日尾のくに子」の記名がある。

■ 作者

日尾邦子は出羽庄内藩出身で、花月園という号を持つ歌人。文政 11 年 (1828) より、出羽庄内藩主酒井家の江戸藩邸奥向に侍女として出仕する傍ら、著名な漢学者で歌人の日尾荊山 (ひお・けいざん) に入門して和歌・書を学ぶ。後に荊山の後妻となり、夫没後に日尾直 (ひお・なお 直子とも。荊山の子) と竹陰女塾を開いた。『竹の下風』『花月園謾筆』などの著作がある。

📖 本文を読む

< 版本 >

『貞婦染女行状』日尾のくに子 文苑閣 1857 [K97/21]

※題箋には「現存貞婦染行状」とあり

『〔貞婦染女行状〕』日尾のくに子 文苑閣 1857 [K28.98/26]

※題箋なしのため、内表紙より題を採用

< デジタルアーカイブ >

奈良女子大学学術情報センター 奈良女子大学所蔵資料電子画像集
女性関連資料集「貞婦染女行状」 ※翻刻付き

📖 参考文献

福田安典「日尾荊山判『七十六番歌合』をめぐって」(『国文目白』54 日本女子大学 2015)

※当館未所蔵 日本女子大学のHPより閲覧可 (文学部日本文学科研究活動の頁)